昭和二十九年一月十日　初版印刷
昭和二十九年一月十五日　初版發行

昭和文學全集28
尾崎士郎集

著作者　尾崎士郎
發行者　角川源義
印刷者　小田茂作
東京都品川區大井寺下町一四三〇

發行所　東京都千代田區富士見町二ノ七
角川書店
振替東京一九五二〇八
電話九段一〇九四・八七〇八

本文紙　本州製紙株式會社
クロース　日本クロス工業株式會社
印刷所　東日本印刷株式會社
製本所　小泉製本所

Printed in Japan

尾崎士郎集

昭和文學全集

角川書店版

目次

卷頭寫眞

筆蹟

人生劇場

　青春篇　七

　愛慾篇　一五七

　殘俠篇　三〇三

　人生劇場餘談　五〇〇

解說　坪田讓治　五〇五

年譜　五〇六

尾崎士郎集

秋の夜や難
声高く極
河を渡る
墨海士浪

人生劇場　青春篇

序　章

「三州吉良港」

一口にさう言はれてゐるが、吉良上野の本據は三州横須賀村である。後年、伊勢の荒神山で、勇ましい喧嘩があつて、それが今は、はなやかな傳說になつた。そのときの若い博徒が、此處から一里ほどさきにある吉田港から船をだしたといふので、港の方だけが有名になつてゐるが、しかし吉良といふ地名が現在何處にも殘つてゐるわけではない。

その、吉良上野の所領であつた横須賀村一圓で「忠臣藏」が長いあひだ禁制になつてゐたことは天下周知の事實である。これは一面、吉良上野が彼の所領においては仁德の高い政治家であつたといふことの反證にもなるが、同時に他の一面から言へば一世をあげて嘲罵の的となつた主君の不人氣が彼の所領の人民を四面楚歌におとしいれたこともたしかであらう。

まつたく「あいつは『吉良』だ！」といふことになると旅に出てさへ肩身の狹い思ひをしなければならなかつた時代があるのだ。しかし、さうなれば、こつちの方にも（忠臣藏なんて高々芝居ぢやねえか）、——といふ氣持が湧いてくる。（うそかほんとかわかるものか、あんなものを一々眞にうけてさわいでゐるろくでなしどもから難癖をつけられてゐるうちのおとのさまの方がお氣の毒だ）——

三州横須賀は肩をそびやかしたのである。そのかはり日本中の芝居小屋で「忠臣藏」がどんなに繁昌しようとも、この村だけへは一足だつて踏み入れたら承知しねえぞ！

平原の中にぽつねんと一つ、置きわすれられた村である。（村といつても矢作古川の沿岸にあつて前には吉田といふ港をひかへてゐるだけに運輸灌漑の便はおのづから交通の中心となつて、何時のまにか、上町、下町、法六町、吹貫町といつた風に村全體が一つの市街に構成されてゐたが）

しかし、さすがに明治になつてからは片意地な理窟をいふものもなくなつてしまつた。それで村一ばんの劇場である本明座で、忠臣藏が臍の緒切つて興行されたことがある。すると思ひがけないことがおこつた。判官切腹の場であつたが、大星由良之助が勢ひこんで花道をかけてくる途中で、ひどい胃痙攣をおこしてしまつたのである。

「力彌、——由良之助は？」

「いまだ參上——」

と言つてから、ちよッと間を置いて、力彌に扮した色の生白い俳優が「つかまつりませぬ」といふところださうであるが、そこで、かんじんの由良之助が動けなくなつてしまつたのである。舞臺では內匠頭が腹に刀を突きさしたままのすがたで痺れをきらしてうんうん唸りつづけてゐるのに由良之助が花道でへたばつてしまつたのでは仕方があるまい。

芝居はこれでめちやめちやになつた。これはいふまでもなく吉良上野の靈が祟つたのだといふことに衆議一決した。そこで、改めて丁寧な慰靈祭が行はれ、興行がやりなほしになつたが、このことが近村につたはると大へんな人氣をあふつて初日は小屋の割れるやうなさわぎになつた。ところがまたしてもそのどさくさのあひだに樂屋うらから火が起つた。小屋は大混雜のうちにみるみるうちに燒け落ちてしまつた。

忠臣藏の興行がながいあひだうちたえてゐたのはそれがためであるといふ。しかししばらくたつと一人の男がうまいことを考へついた。つまり、吉良上野の出る場面だけをすつかりカットしてしまつたらいいぢやないかといふのである。吉良を出さなくたつて何故內匠頭が切腹しなければならぬかといふくらゐのことは見物にだつてわからぬ筈はあるまい。——すると、もう一つ積極的な意見があらはれてきた。「それもさうだが、そんならいつそのこと內匠頭をわるものにしてしまつたらどうだ？」

その次の興行では、芝居小屋の前に〆縄を張つた御堂がつくられた。うやうやしく吉良上野の靈がまつられたのである。それ故、木戸錢をはらつた人たちはその前に立つてぽんぽんと拍子を鳴らした。
　舞臺の上では俳優がすべて「師直」を誹謗する言葉を禁ぜられたのは當然である。そこで刄傷の場面がなくて幕があくとすぐ內匠頭が「無念！」とさけんで切腹するといふ妙な芝居が出來上つた。
　この「吉良港」で、ある朝――村の遊俠兒である太田仁吉が伊勢の喧嘩で死骸になつてかへつてきた。霧のふかい朝であつたが、村はその噂で湧きかへるやうだ。下町通りにある寶泉寺の廣場にあつまる人の數はだんだんふえてくる。まるで、吉良邸からひきあげる赤穗浪士を見るやうな思ひで――その中に、村の旦那衆のひとりである辰巳屋の瓢太郎の蒼ざめた顏が今にも泣きさうになつてぶるぶる顫へてゐるのが際立つて見えた。
　まつたく瓢太郎は悲しかつた。これは、人情ぶかい彼の氣質のためだとも言へるが、しかし、仁吉ときつかり結びつくことによつて、とにかく村境までは肩を張つてあるくことの出來た彼が急にうしろ楯を失つてしまつたためであると言へないこともない。（それほど村には小さいやくざが張りあつてゐたのである。そして彼等の勢力がそれぞれのかたちで、旦那衆がたの生活に影響してゐた）
　かういふ現象は、この村がながいあひだ孤立に置かれてゐた結果にちがひないが、しかし、瓢太郎にしてみれば彼が途方もなく仁吉をすきであつたといふ單純な解釋だけにあてはめることの方が一層適切である。
　しかし、いづれにしても仁吉の死は村の形勢を一變した。荒神山のはなやかな大詰は吉良一圓においての博徒の淋しい大詰でもあつた。
　まもなく仁吉一家はちりぢりになつて、ケチな刄傷沙汰で監獄へゆくものもあれば、他國へ流浪するものもあり、意氣地ない連中だけが町で小さい商賣をはじめた。仁吉から多少の血統をひく常吉といふ男が瓢太郎の世話をうけて、法六町にある辰巳屋の借家のひと棟に「吉良常」と名乘る小料理屋を營んでかすかにやくざ稼業の名殘りをとどめてゐたとは言へ、しかし、もう「吉良常」に幅をきかせる時代ではなかつた。
　それ故、うすぎたない褞袍を着て、店頭にしよんぼり坐つてゐる「吉良常」のすがたは、誰の眼にも痛々しく映つた。
　仁吉が「吉良常」のことを「ぽんち」と呼んでゐたので、それが何時の間にか彼の通り名になつた。子供達は、冬でも素足であるいてゆく彼のうしろから、
「ぽんちたびなし」
　と言つてはやしたてた。すると、やうやく二十をすぎたばかりの「吉良常」は眞赤になつて子供たちの逃げてゆくあとを追つかけてきた。
　子供たちの中によくないやつがゐて、何時の間にか「ぽんちたびなし」を終ひから言ふくせがついてしまつた。それが可笑しいよりもかへつて物哀れに聞える。そして、寒さうに肩をすぼめてあるいてゆく、この氣のいい、人好きのする男のうしろすがたを一しほわびしくさせたのである。
　瓢太郎は、ときどき滯納した家賃の言ひわけにやつてくる「吉良常」をみると露骨に顏をしかめてみせた。
「仁吉はえらかつたな！」
　――さういふ瓢太郎の厭味は「吉良常」には一ばん辛かつたらしい。その頃、莨の製造業をお上に返上して、肥料問屋をはじめてゐた瓢太郎はすでに五十をすぎてゐた。それ故彼の頭の中は八つになつた伜の瓢吉のことで一ぱいだつた。
　辰巳屋の屋敷は法六町の半分を領有してゐる。土塀の內側には松の並木がならび、うしろは宏大な竹藪が晝でもうすくらく煙つてゐた。
　瓢太郎は朝起きると、瓢吉をつれて屋敷の中をひとまはりすることを日課のやうにしてゐたが、あるとき、うら庭の隅にある高い銀杏の木の下までゆくと、何か思ひだしたやうに立ちどまつた。

「瓢吉！」彼は元氣のいい聲で伜を呼んだ。
「この木へのぼつてみろ！」
「この木つて、どれでえ！」
「銀杏の木だ」
「高くてのぼれんがえ」
「のぼつてみんでわかるか、――おとッつあんが見とつてやる、のぼれ！」
　神經質な瓢吉は父親の樣子が何時もとちがつてゐることを直感すると慌てて下駄をぬいだ。そして裸足になつてすぐのぼりはじめたが、銀杏の木は下廻りが、やつと彼の兩手をひろげなければ抱へられぬほどの太さである上に、手がかりになる枝がないので、瓢吉の小さい身體がべつたりと吸ひついたと思ふとすぐすべり落ちた。同じことを何べんくりかへしても同じだつた。
「あかん！」
　瓢吉の澄んだ眼が哀れみを乞ふやうに顫へながら今にも泣きさうな顏になつた。
「何があかん、――ほんなことでどうする、もつとしつかりやれ！」
　瓢吉は半分べそをかきながら、しかし、同じことを何べんとなくくりかへしてゐるうちにやつと兩足を地上からはなして、銀杏の幹にすがりつくことができるやうになつた。
「よし！」
　と、瓢太郎が叫んだ。「一錢やるぞ、遊んで來い！」
　瓢太郎はにこにこしながら瓢吉の手の屆いたところに小刀でしるしをつけた。「毎日やるだぞ、あしたはてつぺんまでのぼれ」
「のぼる」
　と瓢吉が答へた。
「のぼつたら何でも買つてやる」
「鐵砲を買つてくれるかえ？」
「買つてやるぞ」
　――これが、瓢太郎の考へついた教育法だつた。それ故、毎日同じことがくりかへされた。小刀の目じるしはだんだん上へのぼつていつてもう瓢太郎の手の屆かぬところまでになつた。そして一ト月經たぬうちに、瓢吉は猿のやうなあざやかさで頂上までのぼつてしまつた。
「おとッつあん！」
　上から、勝ちほこつた小さい聲が聞えてきた。瓢吉はうれしさで胸がわくわくしたが、しかし瓢太郎のよろこびはそれどころではなかつた。
「手がはなせるぞ！」
　上から瓢吉が叫んだ。
「よし、はなしてみろ！」――瓢太郎が下から手をふつてみせた。(彼には伜のすがたが蟬のやうに見えた)
「えらいぞ！」
　瓢太郎が手をたたいた。「そこから何が見える？」
「何でも見える――」
「言つてみろ！」
「馬が見える」
「馬が何處にをる」
「橋の上にをる」
（一臺の驛馬車が春の陽ざしをあびて、彼の視野の中をまつすぐに走つてくる）――遠い平野のはてに點在する村が綠のかたまりのやうに見え、そして、彼の住んでゐる町さへ、今は彼の眼の下にうづくまつて、それは彼よりもずつと小さくなつてしまつた。
「萬歲！」
　と、瓢吉が腹一ぱいの聲で叫んだ。何とうきうきした氣もちではないか。遠い山が雲とすれすれになり、その下に見える鎭守の社は手をはなしただけですぐ飛んでゆけさうだ。
　そのとき、下から瓢太郎の聲が聞えてきた。
「しつかりとまつとれ、手をはなしちやいかんぞ！」
　瓢吉はびくつとして下を見おろした。親爺が片肌ぬぎになつて銀杏の幹に兩手をあててゐるのが見えた。すると、かすかな波動が梢の方へつたはつてきた。徐々にだんだん強く――それも最初は風があたるくらゐの感じだつたが、まもなく高い銀杏の木が前後に大きくゆれはじめた。
「しつかりとまつとれ！」
　瓢太郎は絕えず下から聲をかけた。瓢吉の眼の前では、あらゆるものがうごきだしたのである。そして、もう何を見ることもできな

くなつてしまつた。

「おそげえ（怖いといふ意味）、おそげえ！」

瓢吉は夢中になつて叫んでゐるばかりだ。

（幹がゆれるごとに全身の力がぬけて今にもふるひおとされるやうな氣持で——）

「おそげえことはないぞ、——おりて來い！」

瓢太郎は汗びつしよりになつてゐた。そして、泣きながら、やつとおりてきた瓢吉をみると、すぐに、

「鐵砲を買つてやる、來い！」

さう言つて先に立つてあるきだした。

瓢太郎はこのとき、すでに自分の人生が終りにちかづきつつあることを知つてゐたのである。

それ故、彼の頭は瓢吉を育てることで一ぱいなのだ。

彼は若い頃からひどい胃弱で苦しんでゐたが、それが難病の胃癌だといふことがわかつたのは四十をすぎてからである。半年あまり彼は病院を轉々としてくらしてゐた。しかし、何處へ行つてもよくなる徵候は見えなかつた。それよりも田舍の病院生活でわるいことをおぼえてしまつた。それは、あるときの應急手當でモルヒネの注射をしたことだつた。それが、今となると、半日もモルヒネなしでくらすことができなくなつた。最初のうちは、知合ひの醫者の手をわづらはしてゐたのが、そんなことではもう間に合はなくなり、町の藥種屋が一週間に一ぺんづつ、こつそりモルヒネの瓶を持つてくるやうになつた。今は自分の手の屆く範圍で注射する場所をさがすのさへ困難になつてきた。注射のあとはすぐに赤黑く瘤のやうにかたくなつて、ときどき疼くやうに痛みだした。

モルヒネが切れかかると、目まひがして、頭がぼうつとなり、手がしびれてすぐ眠くなつた。

仕事がものうくなり、氣力がめつきりおとろへてきた。

瓢太郎は誰に對しても、まるで別人のやうなやさしい男になつてしまつた。

「瓢吉——えらくなれえ、貴樣はこの村の奴等の眞似をするな、何でも無鐵砲なことをしなきやあ、えらくなれねえぞ！」

さういふときに彼はきつと仁吉のはなしをして聞かせた。はなしてゐるうちに仁吉はだんだん現實の人間から遠ざかつて、すばらしい英雄になつてしまつた。それが瓢吉の頭に反映すると、仁吉は何時も緋縅の鎧を着て白い馬に乘つてあらはれてきた。

瓢太郎が、さう言ふのも無理がないのだ。三十をすぎると、この村では誰も彼もひねこびれた老人のやうになつてしまふ。物資がゆたかで、生活に苦しむ必要のないせゐもあるが、山にかこまれた平原に特有な氣候の和かさが村びとの野心を性慾にだけ限定してしまつたからだと言へないこともない。まつたく一夜の秋の夜祭で短い夜を樂しむために一生を棒にふつてしまふやうな若者がざらにある。（矢作古川には、春近くなると、赤ん坊の死體が、うき袋のやうにぽかぽかうかんでながれてゐるのを毎日のやうに見たといふはなしを得意になつてしやべつた老人があるがこいつはどうだか、——）

辰巳屋の屋敷が賣りに出たといふうはさがつたはつたのは、瓢太郎の身體がすつかりいけなくなつた頃だ。事實はそれほど窮迫してゐるといふほどでもなかつたが、しかし、そのうはさはまもなく一つ一つかたちの上にあらはれてきたのである。先づ、裏の竹藪が賣りはらはれた。屋敷をかこんでゐる松の並木が伐りとられた。それから法六町に軒をならべた辰巳屋の貸家までも住んでゐる男が知らぬ内に、何時の間にか大家の名儀人がかはつてしまつてゐるといつた風に。——

かういふ慌しい變化は小さい瓢吉の眼にもありありとうつつてきた。まつたく誰にしたつて落ち目になつたが最後だ。瓢太郎が權柄づくな顏をして大きな口をきいてゐたあひだは村ぢゆうが彼に親しみをよせてゐたのに、彼の方が人なつかしい靜かな男になると妙なものでこんどは誰も彼も逆にじりじりと彼からはなれていつた。

ある晩、彼の若い女房であるおみねが（おみねと彼とは二十も年がちがつてゐた）この村から一里ほどはなれてゐる西尾在の實家へ

行つてのかへりみちを村ざかひの堤防の上で、ひとりの男にうしろから組みつかれた。彼女は極度のおそろしさのために大聲でわめきながら、手に持つてゐた蝙蝠傘で相手の男をめちやくちやになぐつたが男の力が强かつたのでひとつき胸を小突かれるとそのまま堤防をころころところげおちて泥田の中にはまつてしまつた。おみねが歸つてきてからそのはなしを默つてきいたあとで、瓢太郎は兩腕をわなわなと顫はせながら不審なところをこまかに訊問した。あくる朝、村はづれの「番太小屋」のあとに住んでゐる「甚」といふ泥鰌をすくつてくらしてゐる男が、こんなものが落ちてゐましたがもしやお宅のおかみさんのでは、と言つて、堤防の下の草原にあつたといふ簪を持つてやつてきた。おみねがおそはれたのは夜中だといふのだから、甚がそんなことを知つてゐる筈はないし、それに、甚は長いあひだ瓢太郎から蝨けらのやうに扱はれてゐた男だから、よしんば、その簪に見おぼえがあつたとしたところで、わざわざ持つてやつてくる筈がない。

それ故、甚が來たことはますます瓢太郎をいきり立たせた。彼は甚の表情の中に「ざまを見やがれ！」といふ卑しい好奇心のひらめくのを感じたのである。さうなると、もう居ても立つてもゐられなかつた。

その日の午後――髭をはやした駐在所の巡査が甚のうちへやつてきて、裏で泥鰌をさいてゐる彼を、無理矢理につれていつてしまつた。瓢太郎が訴へたのだ。しかし、結果はわかつてゐた。駐在所から放免されてかへつてくると、甚は、まるで見てきたやうな嘘を村ぢゆうへ吹聽して廻つた。それによると、その夜、堤防の上でおみねにおそひかかつたのは一人や二人の男ではなかつた。

「何しろ、お前、――あのおかみさんが蝙蝠傘をもつて大聲に怒鳴りながらなぐりかかつたとおつしやるんだがよ、へえ。――若え女がそんなときに聲が出るもんかね」

甚は、いかにも渡りものらしい齒ぎれのいい口調で、うすぎたない興味を相手の心に唆りたてた。

甚が怒るのも無理はなかつたが、しかし、それにしても何と哀れな瓢太郎よ！（まつたく人間は落ち目になるものではない）――女房のことで騒ぎたてた亭主のみじめさは古往今來何處へいつても變りはないのだ。それ故、陷穽におとしこまれたものは甚ではなくて瓢太郎だつたといふことになる。

村において辰巳屋の人氣はかくのごとくして地に墮ちた。それが瓢吉の生活の上にさへ濃い翳をおとしはじめたのである。

「やい、瓢丹、待て！」

ある日、村はづれの學校からかへつてくる道で、瓢吉が「番太小屋」の前の廣場までくると、甚の長男である十四になる三平が、道中に待ち伏せてゐる雲助のやうな顔をしてとび出してきた。

三平のうしろには村の惡たれ小僧が四五人、學校の鞄をぶらさげたままの恰好で立つてゐる。

「やい、こつちへ來やがれ！」

三平の權幕にすつかり怯氣だつてしまつた瓢吉が、泣きさうな顔をして立ちどまると、三平はわざと口をとがらしながら、瓢吉の胸倉をとつてひきずつていつた。

廣場の向う側は田圃だ、――そこだけ土がくづれて崖のやうに傾斜してゐるので、往來からは見えなかつた。早春の陽ざしがきらきらとうすい氷にうかんでゐる。瓢吉の眼には、今、そこから歸つてきたばかりの學校の校舎が見え、その前の乾いた往來を吉田港の方へ、白い砂煙りを立ててのろのろうごいてゆく荷馬車が見えたが、すぐ涙がにじんで視野が曇つてしまつた。

「名前を言へ！」と、三平が、たぶん村芝居か何かでおぼえた仕草にちがひない、――左肩をそびやかしながら手に持つた棒きれを前へつき出した。

「瓢吉だがな」と、彼が答へると、急にうしろにうづくまつてゐる仲間の方を向いて、

「おい、瓢吉だげな、――瓢吉ぢやねえ、瓢丹づら（だらうといふ意味）」

さう言つてから、彼は二三歩あとへしりぞいて、いかにも小面憎さうに顔をしかめて、

「やあい、瓢丹が泣くぞ、泣く、泣く、やあ

い！」
　子供たちが一せいに囃したてた。すると、三平が、
「やい、瓢丹、三年のくせに生意氣だぞ！」
と叫んだ。
「——お前おりんに文をやつたづら、やあい、おりんと夫婦になれ、また瓢丹が產まれるぞ！」
（三平は五年生だつた。おりんは下町のすし屋の娘で三平と同級生だつた。親父が早く死んでおふくろ一人の水稼業の家に育つただけに、子供にしてはませてゐるし、華美な丈長をかけたり、袂の長い羽織を着て學校へかよつてくるので、すぐ人の眼につく、だから、白壁のらく書きは大抵おりんのわる口にきまつてゐた）
　しかし、三平の言葉は、臆病な一少年の心に彼の最後の誇りと名譽のために戰ふ勇氣をふるひおこすに足るものであつた。瓢吉は夢中になつて三平に組みついていつた。三平はむしろさう來ることを待つてゐたらしい。彼は瓢吉の頰つぺたを一つぶんなぐると、すぐに敵の兩腕をねぢあげてうしろへ倒してしまつた。その上へ馬乗りになつた三平の足へ瓢吉が嚙みつく、それをはづすとこんどは三平が上から瓢吉の頭へかじりついた。瓢吉は頭がぢいんと鳴つてもう抵抗する力をうしなつてしまつた。街道すぢの「番太小屋」の向ひにある駄菓子屋のおかみさんが瓢吉の泣き聲におどろいて駈けつけたときには瓢吉の首すぢには赤く血がにじんでゐた。
「さあ、言へ！　言へ！　おりんに文をやつたづら、言へばかんべんしてやる」
　三平はあくどいことばでからかひながら、しかしうしろへねぢあげた瓢吉の手は決してはなさうとはしなかつた。おさへつけられてゐるうちに、瓢吉にはほんとに自分が何かわるいことをしたやうな氣がしてきた。甚のうちの裏から、甚の女房がちよつと顏をだしたがすぐひつこんでしまつた。
　そこへ、反對側の畦道の方から不意に人の叫び聲がした。
「野郎、大概にしておくもんだぞ！」
　さういふ叫び聲と一しよに三平は橫つ面を一つはりとばされた。慌てて顏をあげると、朝からやけ酒でも呷つてゐたのだらう。眞赤な顏をして立つてゐるのは、まぎれもない、「ぽんちたびなし」の「吉良常」だつた。
　何しろ子供の喧嘩にほんたうの俠客が顏を出したといふ話はあまりあるまい。三平をけしかけたやつが甚であるにしろ、とにかく損をしたのは「吉良常」にきまつてゐる。彼の胸の底にはまだ昔の旦那衆に對する「仁義」がほのぼのと燻つてゐたのだ。それ故、彼は格別、辰巳屋に義理を立てるつもりではなかつたが、しかし、瓢太郎の伜の上に甚の伜が馬乗りになつてゐるなぞといふことは彼の道德と處世法の中には決してあり得べからざることだつた。こいつは善惡の問題ではない。強弱の問題でもない。小さいやつと大きいやつの問題でもない。唯、町の旦那衆と渡り者との問題なのだ。——「吉良常」がさう考へたかどうかは疑問であるが、とにかく、彼はその晩、「甚」親子をつれていつて瓢太郎の前でぺこぺこお辭儀をさせた。
　「吉良常」のやつたことはまつたく立派だつた。だが、甚にしてみれば、これほど難癖をつけるに都合のいいことはあるまい。甚は昔の親分である「吉良常」にがみがみ言はれたあとで外へ出てくると忌まいましさうに何べんとなく唾液を吐いた。
「——なあ、おい！　赤ん坊の腕をねぢあげて男を賣つた親分を見たこたあるめい！　へつ、馬鹿にしてゐやがる。」
　甚はその晩、上町の居酒屋で、馬方のやうな奴等ばかりゐる前で、一杯機嫌でとぐろをまいてゐた。しかし、瘦せても枯れても「吉良常」である。彼のことを正面から惡く言ふことができないとすれば、こいつは笑ひものにしてしまふにかぎる。
「吉良の仁吉さんが泣くぜ」と、甚が言つた。「かりそめにも、——なお、おい！　さうだづら、自分の血すぢをひいた男が子供の喧嘩を買つて出て大見得を切つたと聞いたら、うかれ節の文句ぢやねえが、地獄で肩身が狭からう」
　甚はしまひの文句は節をつけてうなつた。

しかし、辰巳屋の奥の部屋では、モルヒネが利いてすつかりいい氣持になつた瓢太郎が、かんかんになつて怒つてゐた。その前には瓢吉がべそをかいて坐つてゐた。

「意氣地のねえやつだ、——こんど負けたら家へ入れねえぞ！」

「もう、あんな賤しい子供たちと遊ぶんぢやないよ」

と、おみねが横合ひから言つた。（瓢吉はその日、泣きながら家へかへつてくると、すぐ臺所の柱へしばりつけられたのだ）——これが瓢太郎のスパルタ教育だつたが、しかし彼はあきらかに原因と結果とをはきちがへてしまつた。といふのは、瓢吉を無鐵砲で勇敢な男に、仕立てあげる前に否、さうするために彼自身を途方もない無鐵砲な男にしてしまつたからである。

（モルヒネが利いてゐるときとさうでないときの瓢太郎とはまるで別人のやうだ）

「まるで尻尾をふつてる犬みたいな野郎どもだ！」

彼は、村全體が自分に挑みかかつてくるやうな氣がした。だから、彼がさう言つて村人を罵るときには、決して、一人や二人の男を目當てにしてゐるのではなかつた。（彼に言はせると、この村には伸びやかな生きのいい青年は一ぴきだつてゐやしないのだ。どいつもこいつも小ずるくて正面から口のきけない、——そのくせ、常に小さい打算と物わかりのよさとを裏とおもてに縫ひ合はせてゐる小器用なやつばかりだ）

しかし、かういふ解釋はある意味で若き日の瓢太郎自身を語つてゐると言へないこともない。たとへば、彼等が犬であるにせよ猫であるにせよ、これ等の動物が「さかり」の季節にしめす情熱と來たら大したものではないか。

おりんの家には、若い母親をめあてに一里さきから白いちりめんの兵兒帶を腹一ぱいにしめて月夜の道に牛の皮の雪駄をぢやらぢやら鳴らしながら、村の若い衆があつまつてくる。

辰巳屋の母屋ではひと晩おきに、風呂が立つ。昔からの習慣で、村の古馴染が、

「今晩は——」

と言つて裏木戸からはいつてくる。大抵腰のまがつた老人ばかりで、彼等は杖を縁ばたに立てかけ臺所のうすぐらいランプの下に行儀よく坐つて順番のくるのを待つてゐる。（旦那の家で風呂がもらへるといふことは未だに老人たちにとつて一つの誇りだつた）

臺所と板戸一つで仕切られてゐる廣い佛間では一ト月に一ぺんぐらゐの度數で「百萬遍」の催しがある。

もう秋に近い肌ざはりのひやりとする晩だつた。氣候のせゐでもあるが、そとはいい月夜だし廣間には十人あまりのおぢいさんやおばあさんが、先代から辰巳屋の世話をうけて屋敷の地つづきに建てられた地藏堂に住んでゐる尼僧の了諦さんをまん中にして、「なんまんだ」「なんまんだ」と口々に調子をそろへて大きい數珠をつまぐりながらまはしてゐる。——佛壇にならんでゐる蠟燭の光が人人の顔の上に親しみぶかい翳をきざんで、部屋の中はひそやかに、靜かな幸福で一ぱいだ。

奥の間では、瓢太郎が、彼の讀んだ小說本の中から自分の氣に入つた勇ましいところだけを彼一流の解釋に嘘八百をまじへて瓢吉に聞かせてゐる。彼の話す物語の本體は實を言へば二つしかなかつたが、しかし、彼は何時の間にか自分をその主人公にしてしまつてゐるので、毎晩同じ話で筋は二つがごちやごちやになり、ときに應じて變つてゐた。一つは空を飛んでゆく男の話でその男が人の知らない國を一巡して村へかへつてくると、惡いやつにだまされて非業の最後をとげる。すると、もう一つはその男に一人の子供があつて、その子供がまた、惡ものにたばかられて何十年か牢屋へはふりこまれる。伜は牢屋の中で奇妙な老人にあつて、その老人から寶の埋められてゐる遠い島を貰ふことになる。もうしめたものだ。そいつは劍道の達人だから、牢屋をぬけだすとたちまち大金持になつて、惡ものをみんな殺してしまひ、村を買ひ占めて、土地の大親分になるといふのである。（この話の出所が、「和莊兵衞」と「巖窟王」で

あることを知つたのは瓢吉が中學へ入つてからであるが――）
聞いてゐるうちに瓢吉は早く親父が誰かに殺されてしまへばいいと思つたほどである。彼は鐵砲も持つてゐたし、サーベルも持つてゐたし、だから今や恐るるものは何一つとしてないではないか。瓢吉は胸がわくわくするやうな氣持で、ブリキ製の空氣銃をもつて臺所へ出てきた。（もう百萬遍がすんで、がやがやさわいでゐる人の聲が樂しさうに聞えてきたからである）

老人たちは一人一人上り框に着物をぬいで土間にある風呂へ入つてゐるところだ。そのとき、瓢吉の眼に「おりん」が老人たちのうしろにしよんぼり坐つてゐるのが見えた。瓢吉はどきつとした。生々したおりんの顔と華美な着物の色彩が一座の空氣と不調和であるだけにはつきりうきあがつて見えたのである。

「さあ、おりんちやん、――早うお貰ひなよ」

ぼうつと顔を火照らした籠屋のおばあさんが、湯からあがつてきた。おりんは默つて立ちあがると、平氣で上り框に着物をぬいだ。それは不思議な瞬間だつた。鈍いランプの光の中で、帶の色彩がだらだらと虚空にゆれてゐる。瓢吉は何故おりんが着物なんかぬぐのだらうと思つた。

しかし、おりんはひよいと腰をかがめると着物と襦袢とをひとかさねにして、すつぽりとぬいでしまつた。そして白い肩がすうつと土間の方へ消えていつた。

瓢吉はまるで呼吸が詰るやうだ。身ぶるひがして仕方がない。彼はそのまま父の居間の方へかへつてきたが、

「おやすみなさい」――といふときにも、聲が途中でとぎれてしまつた。

――その頃、日露戰爭がまつさかりだつた。召集令がまいにちのやうに下つて、村びとは出征兵士をおくることで大さわぎだ。（戰爭熱がこのやうに誰の心をもあかるくうき立たせた時代はあるまい）

小學生は授業をやすんで鎭守の社に列をつくつてあつまつた。手に手に旗をふりながら、

あなうれし
よろこばし
たたかひかちぬ――

と、腹いつぱいの聲でうたふのだ、すると、軍服を着た若者が一人一人拜殿の前に立つて、一場の挨拶をのべるのである。誰の顔も感激に燃えて、泣いてゐるやつなんか一人もゐなかつた。みんなうれしくて仕方がないのだ。

人間が召集されると同時に農家から馬が片つぱしから軍馬として徴發された。社のうしろの森のかげになつた廣場には天幕が張られて、その中で軍醫が一ぴきづつ馬の睾丸をぬくのだ。廣場の隅には深い穴が掘られた。拔かれた睾丸が丁寧にその中へうづめられるのである。

天幕がとり拂はれたあとでも、そのあとの土はじめじめしてうす氣味がわるい。――それ故、瓢吉は馬より睾丸の方が氣になつた。彼はそつと自分の睾丸にさはつてみた。どうもこいつは妙なものだ。子供たちは睾丸をうづめた場所の前へあつまつてさわいでゐたが、しかし掘りかへしたあとの土の上を踏みつける勇氣のあるやつはゐなかつた。そこを踏みつけると土がむくむくとうごいて馬がとび出してくるやうな氣がした。

誰かが、今にあの睾丸から芽が出て、木が生えてくるといふ話をした。子供たちはみんなその説に贊成した。

「それだけん、どんな木が生えるづら?」瓢吉がそばにゐた同級生の、下駄屋の息子である信公にたづねると、信公は確信にみちた聲で言つた。

「そりやあ、馬だもん、――馬の木だづら」

しかし、誰も笑はなかつた。子供たちは、未だ馬の木を一ぺんもみたことはなかつたが、信公にさう言はれてみると、ほんたうに馬の恰好をした木が伸びあがつてくるやうな氣がした。

「ほんなら――」と瓢吉が言つた。「人間の睾丸をうづめたら人間の木が生えるかえ?」

「そげなことは知らん!」
　と信公が答へた。

　村は毎晩のやうにお祭りさわぎだ。戦争が終つたのである。(瓢吉の記憶では、戦争ははじまると直ぐにばたばたと終つてしまつたが)

　提灯行列がある。祭禮がある。青年團は毎晩のやうに小屋をかけて芝居をやつてゐるし、生き残つた兵士が歸郷するごとに花火が立てつづけにあがる。その芝居といふのが大したもので戦地からかへつたばかりの兵士が軍服姿で舞臺にあらはれると、下町の角にあるうどん屋の長男がうどんをもつて登場する。

　見物は湧きかへるやうなさわぎだ。「やあ、六さんが出た」「六さんだ、しつかりやれ!」

　しつかりやらうにも六さんの役はそれだけだ。六さんが頭をかきながら名殘惜しさうに引き下ると、こんどは二人の兵隊さんがうどんを喰ひながら、お互に戦争の手柄ばなしをする。これで幕である。それがおもしろくつてたまらないのだ。

　このどさくさの中で妙なことが持ちあがつた。村中切つての夜這ひの名人である床屋の肘鐵がこんどあたらしく辰巳屋へ女中奉公にきた「おひで」をものにしてしまつたのである。肘鐵は毎晩湯殿から忍んできた。眞夏のことで、彼はまつぱだかに褌一つで手拭を肩からぶら下げてうらの藪づたひにかよつてくる。一風呂浴びて、それから忍び込まうといふ寸法である。

　瓢太郎は一挺のピストルを持つてゐた。その頃では最新式の、環をまはすごとに彈丸が一つ一つとびだす六連發銃で、――これは吉良の仁吉の身内であつた「どら猫の安」といふ男が人を殺して臺灣へずらかるときにあづけていつたものだ。

　たぶん、周圍のさわがしさが瓢太郎の心を刺戟したものと思はれる。彼は一發やつてみたくつて仕方がなくなつた。それには夜中が一ばんいい。瓢太郎はある晩、こつそり起きあがつた。彼は中庭に向つてゐる雨戸をあけて濡れ緣づたひにそとへ出た。空はあかるかつたが、樹立の闇は深く、――起きてゐる人間は一人もゐない。

(瓢太郎は浴衣の右腕をたくしあげた)

　母屋の隅にある納戸の方でかたかたと音がした。「もしか誰かが」と思つたがこんな眞夜中に誰もゐる筈はないのだ。彼は右足を前に出し、いよいよ引金をひく準備をした。

　裏藪の方で笹ずれの音がして、人が近づいてくるやうな氣持だ。

(もしかしたら?)といふ感じがどつときたが、(構ふものか、やつつけろ!)といふ叫び聲が心の底から聞えた。

　引金に指がふれると同時だつた。闇の中をひとすぢの光が流れた。それから地ひびきがして、おそろしい音が彼の耳へすべりこんだ。兩足がわなわなと顫へたが、しかし、一瞬間、胸の中にぽつかりと大きな穴があいたやうな、すうつとした氣持になつた。そのとき、彼の耳は遠くに人の悲鳴のやうなものを聞いたやうな氣がしたが、それよりも銃聲の餘韻の方が彼の耳に長く殘つてゐた。まつたく彼の耳も頭もその一發の銃聲でうづまつてゐたのである。

　瓢太郎はまだうすい煙を吐いてゐる銃口を下に向けたまま家の中へ入つてきた。おみねが眞蒼な顔をして蚊帳の中からとびだしたところだつた。

「瓢吉は寢とるか?」と、彼はおみねを見るとことさら落ちついた聲で言つた。

「よう寢とりますがな」

　おみねが不安におびえた眼で瓢太郎を見ると、彼はにやにや笑ひながらピストルを棚の上に置いた。

「起して來い!」

　と瓢太郎が言つた。そして、とりみだしたおみねのうしろ姿を眺めながら瓢太郎は火鉢の前へどつかりと胡坐をかいて、湯の沸ぎつてゐる鐵瓶をおろした。

　その晩――肘鐵は、一杯ひつかけたあとですつかりいい氣持になつてゐた。まつぱだかで手拭を肩にかけ、藪蚊をはらひながら竹藪を忍んでくると、まつたく鼻唄でもうたひたいやうな氣持ではないか。闇の中を手さぐりにあるいて(前の夜の記憶が彼の官能を一ベ